

SHOW HEYシネマルーム

★★★★★

ロスト・イン・ラ・マンチャ

配給/シネカノン

2003 (平成15) 年5月14日鑑賞

<ヘラルド試写室>

Data

共同監督: キース・フルトン、ルイス・ベベ

出演: ジョニー・デップ/ヴァネッサ・パラディ/ジャン・ロシュフオール/テリー・ギリアム

👁️👁️ みどころ

構想10年、製作費50億円をかけた「鬼才」テリー・ギリアム監督の『ドン・キホーテを殺した男』の撮影は2000年9月に開始されたが、相次ぐトラブルにより、わずか6日間で頓挫してしまった。『ロスト・イン・ラ・マンチャ』は、この頓挫した『ドン・キホーテ』の製作現場を描いた映画。同じく撮影現場をターゲットに描いた深作欣二監督の名作『蒲田行進曲』と対比すれば面白い。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<未完成の超大作映画『ドン・キホーテを殺した男』>

総製作費50億円をかけたテリー・ギリアム監督の最新作『The Man Who Killed Don Quixote』(『ドン・キホーテを殺した男』)は、ジョニー・デップの主演で、2000年9月から撮影が始まった。しかし……。撮影現場に突如発生した雷雨と大雨(洪水)、ドン・キホーテ役のジャン・ロシュフオールの病気、撮影を邪魔するNATO軍の空軍機etc、とてもじゃないが撮影は不可能。撮影開始からわずか6日間で撮影は頓挫してしまった。なぜか、「過去のドン・キホーテの映画化は必ず災難に遭っている。呪われた企画なんだ」(テリー・ギリアム談)とのこと。したがって、テリー・ギリアム監督の『ドン・キホーテ』は数多くの苦難の末に、未だ完成していない。

<『ロスト・イン・ラ・マンチャ』の主役は……>

平成15年7月5日から大阪シネ・リーブル梅田で公開される『ロスト・イン・ラ・マンチャ』は、『The Man Who Killed Don Quixote』(『ドン・

キホーテを殺した男』の撮影現場や舞台ウラを描いて映画化したものだ。従って、この『ロスト・イン・ラ・マンチャ』での主役は何と言ってもテリー・ギリアム監督自身だ。テリー・ギリアム監督は、ドン・キホーテという狂気と正気の境目を彷徨う興味深い人物やセルバンテス原作のストーリーの素晴らしさに魅せられ、10年間にわたって構想を描き続けてきたとのことだが、その思いが実によく分かる。

素晴らしいのは、テリー・ギリアム監督自身が描く数多くの『絵コンテ』。よろいかぶとに身を固め、馬上で槍を構えるドン・キホーテやロバに跨がる従者のサンチョ・パンサ。ドン・キホーテが巨人と思いつ込んだ何本もの腕をもった風車に向かって突進していく有名な場面も実に躍動感があり、素晴らしい。

テリー・ギリアム監督の「10年間の構想によって作品のイメージはすべて頭の中で完成している」という自信に満ちた発言もスゴイ。

そして現実の撮影現場。出来あがった映画を観ることももちろん楽しいが、その舞台ウラをこんなにしっかりと見せてくれる映画は、あまりないだろう。製作費（スポンサー）を集める苦勞から撮影現場の見学者へのサービス、さらに事故に遭った場合の損害保険の処理まで、すべて舞台ウラを興味深く見せてくれる。

<この映画は、本物公開の予告編・・・>

パンフレットによると、『未来世紀ブラジル』、『バロン』、『12モンキーズ』などをつかったテリー・ギリアム監督は、「反逆的で無軌道な、カネを使いまくる変人監督」というイメージの強い「鬼才」らしい。しかしこの『ドン・キホーテを殺した男』の撮影現場を見る限りは、そんなイメージは全くない。逆にその才能をひらけさせず、いつもユーモアをもち、笑いながらスタッフを励まして、理想的な映画づくりに取り組む真面目な中年のおじさん、というイメージだ。

まさか、これは『ロスト・イン・ラ・マンチャ』に出演するについて、「演技」しているものではあるまい・・・。

これだけの受難続きの中で撮影が頓挫した『ドン・キホーテ』が、再度テリー・ギリアム監督やそのスタッフの手により完成できたらどんなスゴイものになるだろうか・・・。『ロスト・イン・ラ・マンチャ』はそういう期待を持たせるに十分な映画となっていることは間違いない。

<思い出すのは『蒲田行進曲』>

撮影現場を描いた映画として有名なのは、日本では、深作欣二監督の『蒲田行進曲』。銀ちゃんを演じた主演の風間杜夫、スタントマンを演じ一躍その名を轟かせた助演の平田満、そして「大部屋女優」を演じた松坂慶子らによる日本映画の最高傑作の1つだ。

『ロスト・イン・ラ・マンチャ』は、言ってみれば、『ドン・キホーテ』の撮影現場の姿

をそのまま描き、これにコメントをつけただけの作品だから、最初から映画製作の舞台ウラの面白さを意図して製作した『蒲田行進曲』の方が圧倒的に上出来だと思う。しかし50億円の製作費をかけた超大作の『ドン・キホーテ』が完成すればスゴイだろうと思わせる期待度という意味ではこの『ロスト・イン・ラ・マンチャ』は、まずは成功と言えるだろう。

2003（平成15）年5月15日記